

七十年史』が、永島福太郎氏を編集者に、同

氏はじめ、秋永政孝・村崎清孝・広吉寿彦・

小野恵美男・中塚明・野田甚吾氏を執筆陣に

加えて、このほど上梓をみた。ところで廃藩

置県以来すでに九十一年、奈良県政七十年記

念といえはあるいは不審に思われた方もあ

う。それは廃藩置県で設置された奈良県は

「近代国家化を急いだ明治政府が、その政策

として弱小県整理を推進したことによ」つて

わずか数年にして堺県に併合され、その堺県

が明治十四年さらに大阪府に併合され、「い

つたん独立の県政に浴した大和の国民は、再

度の合併を快しとせない。やがて有志の提唱

に基づき、大阪府から分離独立の運動を展開

した。その運動が奏効して、(明治二十年)奈

良県の(再)設置が発令されるにいたつた」

結果なのである。ところでこの経緯は、廃藩

置県後九十年を経て、いままた現実提起さ

れている問題でもある。急速な近代国家化の

問題に代つて、いわゆる産業の高度成長のた

めに、近畿を一九として広域行政、さらには

統合が、現実のプログラムとして上提されて

いる。とくに奈良県は、大阪府への依存の高

さが問題とされていることは周知のところ

ある。こうしたときに、近畿統合の是非はと

もかくとして、県政の歩みをふりかえつてみ

ることは、まことに時宜を得た企てであると

いえよう。

さて本書は、第一編概説において奈良県七

十年の歩みを概観し、第二編各説において奈

良県再設置の顛末以下、県議会・県庁機構・

町村制の変遷・農業・農地改革・林業・観光

と文化財、さらには紀元二千六百年奉祝事業

等一五項目にわたつて各説し、第三編総合開

発事業として吉野熊野特定地域総合開発事業

が詳述されている。各説は、原史料を豊富に

引用して詳述され、何れも問題の核心をつい

ている。ただ欲をいえば所轄部局の各種統計

をもつと豊富に引用してほしかったところ

であるが、全体のボリュームからすれば止むを

得ないところであろう。第三篇は、吉野川と

いう豊富な水をもちながら、しかも空しく紀

州に流さざるを得なかつた奈良県政七十年の

最大の懸案であり、電力を中心とする総合開

発——「この近代化の恩恵をいかに活用する

か、いな活用できるかに県政の将来がある」

問題である。とはいえ、叙述は事態の経緯の

解説に終つており、この辺にいわば奈良県の

最大の苦悩があると察せられる。

とまれ、経済の高度成長といういわば絶対

的な要請のまに、すでに約一世紀におよぶ

自治の歴史をもつ「府県」がどう対処すべき

なのか、本書はこの大きな問題を提起してい

るといえよう。(A5判 一〇六五頁 昭和

三十七年三月 奈良県発行) (熱田 公)

学界消息

史学研究会関係

十月例会

十月六日(土)午後一時より

於 京大史学科第二教室
ヨーロッパの史蹟をたずねて

豊田 堯

(スライド使用)

国史関係

読史会春季大会

六月十七日(日)午前十時〜午後五時

於 京大文学部第八教室
平安初期政治史の側面 伊藤 宗諒

雑徭について 狩野 久

陸田制度について 泉谷 康夫

「鎌倉殿御使」考 田中 稔

「河原者」の系譜に関する一考察 清水 康代

十四世紀初頭の村落領主 大山 喬平

鎌倉仏教について D・パートン

明治初年の農業生産の地域性 中村 哲

袖工と荘園

赤松 俊秀

読史会例会

宋代 泉の胥吏
六月二十九日

佐竹 靖彦
陳列館会議室

七月例会

尺牘の芸術性
九月二一日

杉村 邦彦
葉友会館

七月一四日(土)

於 葉友会館

横田健一「マッチ工業発達史」

エジプトから帰つて
一〇月二一日

清水 誠
東洋史研究室

小葉田淳「辨の制度」

「東洋史研究」二二—合評会

◎終了後、小葉田教授・ハワイ出張の歡送パ
ーティーを行なつた。

九月例会

西洋史関係

合評会

九月八日(土)

於 葉友会館

楠瀬 勝「地頭の代官支配について」

西洋史読書会例会 於 京大西洋史研究室
九月二十二日(土)

『西洋史学』第五十四輯の合評

赤松俊秀「寺奴袖工説について」

九月二十九日(土)

村岡 健次

十月例会

パークの思想について

村岡 健次

十月十三日(土)

於 陳列館演習室

柴田 実「荒神考」

十月十三日(土)

早川 良弥

小葉田淳理事の外遊

叙任権闘争前のチェー
リングン貴族支配制

小葉田淳理事は、ハワイ大学東西文化セン
ターの招きにより、九月五日羽田発で出発
した。なお、滞在は十ヶ月の予定である。

A Symposium: Approaches to
History, ed. by H. P. R. Finberg
(London, 1962) 200pp

前川貞次郎

東洋史関係

十月二十日(土)

越智 武臣

大学院会例会

清教革命の思想的決算

越智 武臣

六月一日

葉友会館

「東洋史研究」二〇—四 合評会

十月二十七日(土)

欽定憲法体制の保守的護教論
—フロイセンと日本の場合—

六月一五日

神戸 屋

皇田 幸男

編集後記

四十五巻六号—今年度の最終号をお届け致
します。昨年からのおくれがようやく取り戻
せるめどが立つたというわけです。更に定期
的にお届け出来るよう編集委員会としても努
力を傾けますが、くどいようではあります、
会費による定期刊行物という本誌の性格に鑑
み、前納について御協力を要請する次第です。
先号本欄に於いて、朝尾委員が本欄に対す
る意見を開陳されましたが、時候の御挨拶的
な本欄は発展的に解消し、拡充することに對
する検討が進められて居ります。来年度第一
号からはスタイルを一新してお目にかかるこ
とでしよう。なお、京都大学偏重的な学界消
息欄についてもスタイルの一新についての検
討が同時に加えられて居ることを申し添えま
す。御期待下さい。(横山裕男)

史 林 (第四五巻第六号) 定価二〇〇円
一九六二年一〇月二五日印刷
一九六二年十一月一日発行

発行所 京都市左京区吉田本町
京福大学文学部内
史 学 研 究 会
理事長 振替京福五一五五番
京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社
印刷所